

# How did Bergson come to be interested in psychological researches? : from a methodological perspective

MURAKAMI Ryu

Although rarely pointed out, Henri Bergson (1859-1941) was highly interested in psychological phenomena, or to be exact, in researches on such phenomena. But why? In this paper I am going to clarify the reason.

Unfortunately there is no article in which Bergson directly mentions psychological researches except for “Phantasms of the Living” and “Psychical Research” (1913). So I start by examining this exceptional article, and after that I turn my eyes to several related articles.

Finally I will conclude that Bergson, whose speculation is firmly based on modern sciences, regards psychological researches as the newest one.

# なぜベルクソンは心霊研究に関心をよせたのか

—— 哲学上の方法論の観点から ——

村 上 龍

## 序

およそ周知の事実とは言いがたく、また研究史上で注目されることもほぼ皆無であったと言ってよいが、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 一八五九—一九四一年)<sup>1</sup> は心霊現象に、より正確には世紀転換期に盛りあがりを見せた心霊現象の研究に、多大な関心をよせていた。なるほど、彼は自らそうした類いの研究に手を染めることはなかった<sup>2</sup>。しかしながら、ベルクソンは一九一三年に、ロンドンを拠点とする心霊研究協会 (The Society for Psychical Research) の会長を一年のあいだ務めた経歴さえ有しているのである。

この「熱烈な好奇心 (une ardente curiosité)」(E.S. 61 : 861) はいかなる要因によって動機づけられていたのか。上述の協会の会長在職時に協会員に向けておこなわれた講演の記録「生者の幻」と「心霊研究」(一九一三年)<sup>3</sup> をのぞけば、著作中では心霊現象ないし心霊研究への言及がほとんど見られない点に鑑みると、あるいはそれはたんなる好事家風の好奇心でしかなかったのかもしれない。

---

<sup>1</sup> ベルクソンの著作からの引用は *Œuvres, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959<sup>1re</sup>)* に拠り、以下の略号とともに単行本、著作集の順に頁数を丸括弧内に記す。M.M. : *Matière et mémoire*, 2008 (1896<sup>1re</sup>)。

E.S. : *L'énergie spirituelle*, 2009 (1919<sup>1re</sup>)。

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, 2008 (1932<sup>1re</sup>)。

ベルクソン関連のその他の資料からの引用にさいしては、以下の略号とともに頁数を丸括弧内に記す。

Mél. : *Mélanges*, André Robinet (éd.), P.U.F., 1972。

C.II : *Cours II*, Henri Hude (éd.), P.U.F., 1992。

<sup>2</sup> なお、ベルクソンは哲学的キャリアのごく初期に、当時フランスで実験心理学の主要な研究対象の一つになりつつあった催眠症状 (hypnotisme) について考察し、一八八六年にはその成果を一本の論文にまとめている。Cf. Mél. 333-341。とはいえ、催眠症状は心霊現象にあたるものではないだろう。

<sup>3</sup> 一九一三年におこなわれたこの講演の記録は、のちに論集『精神のエネルギー』(一九一九年)に収録された。

それとも、心霊研究を興味ぶかく見守ることは、哲学者ベルクソンにとって何がしかの意味をもっていたのだろうか。そして、もしそうだとすれば、心霊研究によってもたらされる知見は、彼の哲学上の思索にいかなる点で資するところがあったというのか。本稿ではこの点について考察する。

とはいえ先述のとおり、本稿の目的にとって直接の手がかりとなりうる著作中の記述はきわめて乏しい。したがって以下では、上述の講演の記録に目をおしたうえで、そこでの議論と関連する——その関連は心霊現象ないし心霊研究の文脈からは離れたところでのそれということにならざるをえないが——ベルクソンの文章にまで視野をひろげ、これらを突きあわせながら考察を進めることにしたい。

## 第一節 心霊現象ならびに心霊研究の概要

ところで、ベルクソンが関心をよせた世紀転換期の心霊研究とは、また、その対象となる心霊現象とは、具体的にはどのようなものであったのか。まずはその点をとりいそぎ概観しておこう<sup>4</sup>。

この文脈において問題となる心霊研究の端緒をひらいたのは、「ハイズヴィル事件」と呼ばれる一八四八年の出来事である。ニューヨーク州ハイズヴィルに居をかまえるフォックス家では、この年の三月下旬から不思議な物音が頻繁に聞こえはじめたのだが、やがて次女と三女の姉妹が指音をつうじ、この叩音の主であるところの霊との意志疎通に成功したと自称するにいたる。この事件が新聞等の新興のメディアによって伝えられるや、欧米諸国ではまたたく間に交霊会がブルジョワ家庭を熱狂させ、人々は嬉々として「テーブル・ターニング<sup>5</sup>」に興じることとなった。

そうしたなかで、霊との交信にかんしてとくにすぐれた能力を有するとされる、霊媒と呼ばれる人物が次々にあらわれ、彼らの霊的能力に接することを目的とした交霊会もさかんに催されるようになる。もっとも有名なのは、ダニエル・ダン格拉斯・ホーム (Daniel Dunglas Home, 一八三三—一八八六年) であろう。

---

<sup>4</sup> 本節の記述にさいしては次の文献に依拠した。Cf. ジャネット・オープンハイム『英国心霊主義の抬頭——ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史——』和田芳久訳、工作舎、一九九二年。デボラ・ブラム『幽霊を捕まえようとした科学者たち』鈴木恵訳、文藝春秋、二〇〇七年。

<sup>5</sup> 机をたたく音をつうじて霊と交信しようとする、当時もっともポピュラーであった交霊会のスタイルである。日本における「コックリさん」に類するものと考えてよい。

彼はどんなに明るく、また騒がしい環境下にあっても安定して霊と交信し、自らの身長を伸び縮みさせ、空中を浮遊し、高温に耐え、自在に叩音を発生させ、火の玉を飛ばし、部屋を振動させたと伝えられている。また、とくに物質化現象<sup>6</sup>に秀でていたとされるフローレンス・クック (Florence Cook, 一八五六一—一九〇四年) も特筆に値する霊媒である。彼女はケイティー・キングという名の霊にたびたび完全な肉体をあたえたとのことである。

こうした霊媒の存在、そして彼らがひき起こす心霊現象は、当時の一部の哲学者、科学者の関心を強烈にかきたて、果てはこれについて真面目な研究を企てる者まで現れた。一八八二年にはそれらの人々によって、先述の心霊研究協会が設立される。同協会の歴代の会長を挙げるだけでも、倫理学者ヘンリー・シジウィック (Henry Sidgwick, 一八三八—一九〇〇年)、進化論の草分けをなしたアルフレッド・ラッセル・ウォレス (Alfred Russel Wallace, 一八二三—一九一三年)、化学者ウィリアム・クルックス (William Crookes, 一八三二—一九一九年)<sup>7</sup>、物理学者オリヴァー・ロッジ (Oliver Joseph Lodge, 一八五一—一九四〇年)<sup>8</sup>、哲学者、心理学者ウィリアム・ジェイムズ (William James, 一八四二—一九一〇年)、生理学者シャルル・リシェ (Charles Robert Richet, 一八五〇—一九三五年)、そしてベルクソンと、錚々たる名前がならぶ。

ここに集った学者たちの思惑はかならずしも一様ではなかった。ただし、心霊現象の検証をつうじ死後の生の証明をめざすにせよ、反対に彼岸の否定をめざすにせよ、とられた手法は同一であった。すなわち、霊媒を対象とした実験ならびにインタビュー、および、記録や伝聞の収集と比較検討、そしてアンケート調査である。

## 第二節 一定の確実性をそなえた一科学としての心霊研究

### ——「生者の幻」と「心霊研究」(一九一三年)——

心霊研究にたいするベルクソンの「熱烈な好奇心」はいかなる要因によって動機づけられていたのか、これが本稿の問いであった。本節では、先述のように

<sup>6</sup> 何らかの物質に霊が宿る、もしくは霊を宿らせる、ことを意味する用語。

<sup>7</sup> クルックスは様々な器具を用いて霊媒たちを精力的に調査したようであり、なかでも上述のクックについてはとくに持続的かつ周到な調査をおこなったことで知られる。

<sup>8</sup> ロッジにいたっては、第一次世界大戦中に没した息子との霊媒を介した通信の記録、と称するものを刊行してさえている。Cf. オリヴァー・ロッジ『レイモンド——「死後の生存」はあるか——』野尻抱影訳、人間と歴史社、一九九一年。

ベルクソンが心霊研究についてまとまった仕方論じた唯一のテキストである「[生者の幻]と[心霊研究]」を検討しよう。

ベルクソンは講演の冒頭で、講堂を埋めつくす協会員たちに向かって、自分は「あなたがたの報告を注意ぶかく読み、熱烈な好奇心をもってあなたがたのお仕事を見守っている」(E.S. 61 : 861)と語りかける。ところが、「あなたがたのなさっているような研究を[科学の名のもとに]非難する」(E.S. 62 : 861)、そのような哲学者、科学者はいまだに多く、協会員はたえず彼らの白眼視にさらされている。そこでベルクソンは、講演の大半をついやして、これら否定論者の反論をいわれなき偏見として退けようとする。

ベルクソンによれば、上述のごとき否定論者が論拠として持ちだすのは、「あなたがたのとり組んでいる現象は異論の余地なく自然科学の対象になる現象とおなじ種類のものであるのに、あなたがたがとる方法、またとらざるをえない方法は自然科学の方法とはしばしば何の接点もない」(E.S. 63-64 : 862)ことである。ポルターガイストや物質化現象等々にしても、それがいやしくも物理的、化学的、生理的な現象であるならば、物理学や化学、生理学、等々にそくして解明されるべきだというのが、心霊研究を「科学の名のもとに」非難する哲学者、科学者の言い分だというわけである。

ところで、自然科学の方法とは何か。ベルクソンにしたがえば、近代的な自然科学は「実験的な方法(la méthode expérimentale)」に、それも、「同様に計測されうる他の可変的な大きさの関数と目される、そのような可変的な大きさの計測」に特化したそれに、もとづくものであり、その意味で自然科学は自らを「数学の娘」として規定することにより成立している。「さいしょにたん生した」「天文学と力学」も、「その次に発展した」「物理学」も、またそれに付随して生まれた「化学」も、比較的あたらしい「生理学」も、世界を数式によって読みとこうとするかぎりにおいて、それらはひとしなみに「一つの理想へ向かうかのようにつねに数学をめざしている」(E.S. 70-71 : 867-868)のである。

じっさい否定論者の言うように、心霊研究協会のメンバーはそのような意味での自然科学の方法をとらないし、またそもそも、そうした方法をとることはしばしば困難であった。たしかに、彼らも霊媒を対象とした実験を実施し、何がしかの計測をおこないはしたが、様々な制約ゆえに、それは実験室におけるようにはうまくゆかない。だからこそ先述のように、彼らは実験の他に、霊媒へのインタビュー、記録や伝聞の収集と比較検討、あるいはアンケート調査などの方法にうったえた。心霊研究を「科学の名のもとに」非難する者はこの点を

問題視するのである。

しかしながら、バルクソンに言わせれば、たとえば善の策としてこれら代替的な調査手法にうったえざるをえないとしても、協会員らの研究はやはりある程度の確実性には達しうるのであり、したがって、「物理学や化学のようにことを進められないからといって、「心霊研究」が科学的でないなどと結論する」(E.S. 66 : 865) べきではない。

本物の幻視が過去にさかのぼるものであれば、あなたがたは資料を研究し、批判して、歴史の一頁を書く。その事実が昨日のものならば、あなたがたは一種の審理をおこなう。すなわち、証人たちにあたり、彼らをたがいに対決させ、また彼らの身元を照会する。私としては[...]あなたがたが取りあげた大半の事例にかんして、当の幻視の話を一入または複数のひとが聞き、しばしば書きとめてさえいるということを受けてはじめて幻視が本物とみとめられているのを見るにつけ、また、事例の数がかきわめて多数にのぼること、とりわけそれらが相互に類似していて同族のように感じられること、たがいに独立した多くの証言が包括的な分析、検査、批判をへてなお一致すること、これらのことを考慮するにつけ——私はテレパシーを、たとえば無敵艦隊の敗北を信じるのと同様に信じるようになる (E.S. 65-66 : 864)。

歴史家がはるかな過去についてそうするように、また裁判官が直近の過去についてそうするように、心霊研究協会の構成員は、ある事例にかんして文献上の、および口頭の証言を可能なかぎり収集し、それらを逐次検証しつつ相互に突きあわせたうえで、当の事例を真なるものと認定している。そして、そのような手続きをへて真なるものと認定された事例は多数にのぼり、かつそれらは相互に類似、一致している。そうであるならば、当該の心霊現象を肯定することは、科学的な見地から言ってむしろ理にかなっていないとみななければならない。なるほど、実験にもとづかず、数式にうったえることもないこうした調査手法をつうじては、「ピュタゴラスの定理の証明によってもたらされる数学的な確実性」や「ガリレオの法則の立証によってもたらされる物理学的な確実性」(E.S. 66 : 864) にまで達することはなかろう。しかしたとえば、一九世紀をつうじて確立されつつあった生物学なども、「いまだ数学的な形式をそなえておらず、またそうなる気配もない」(E.S. 71 : 868) にもかかわらず、すでに自然科学

の一角を占めるにいたっている。だとすれば、「歴史家のそれと予審判事のそれとの中間を占める」「方法」(E.S. 65 : 864)にうったえる心霊研究もまた、狭義の自然科学のそれよりは劣るとしても一定の確実性をそなえた一個の科学とみなすべきであって、これを上述のような仕方では断罪することは不当である。ベルクソンはそのように言うのである。

以上から、心霊研究についてのベルクソンの考え方を次のようにまとめることができるだろう。第一に、なるほど心霊研究は否定論者の言うように、いわゆる自然科学の対象と同種の現象を扱いながらも、数学に範をもとめる狭義の自然科学の方法をとることがない。第二に、しかしながら、否定論者の見解とは裏腹に、心霊研究は代替的な方法をつうじてある程度の確実性には達しうるのであり、そのかぎりにおいて、それはやはり一つの科学として位置づけられるべきである。そして、だからこそ第三に、この研究の動向は興味ぶかく見守るに値する。

### 第三節 「より柔軟な」科学に依拠した哲学

では、それなりに一個の科学とみなされるべき心霊研究を興味ぶかく見守ることは、哲学者ベルクソンにとって何がしかの意味をもっていたのだろうか。残念ながら、上述の講演のなかではそのことは明確に語られていない。そこで、ベルクソンが哲学と科学とのあいだの関係を、とりわけ自身の哲学的思索と科学とのあいだのそれを、どのように考えるのか、本節ではこの点をみることにしたい。

#### 三― 拡張されたデカルト哲学としてのベルクソニズム

——「心理―生理並行論と実証的形而上学」(一九〇一年)——

ベルクソンは「フランス哲学」(一九一五年)と題された論考のなかで、「現代哲学の全体」がデカルトの「『明晰判明な』諸観念の哲学」に「由来する」(Mél. 1158)ことにふれたうえで、なかでもとくに、「哲学と数学とのあいだの結びつきがあまりにも緊密な」デカルト以来、「フランス哲学の本質は科学に依拠する点にこそ存する」(Mél. 1185)と指摘する。そしてこのことは当然、サンフランシスコ万博での展示のために書きおろされたこの文章<sup>9</sup>の著者であり、その意味では

<sup>9</sup> この文章は、サンフランシスコ万博にさいしてフランス政府が出品した『フランスの学問(La science française)』の一項目をなすものである。

当時のフランス哲学の代表者として公式にみとめられていたと言ってよいベルクソン自身にもあてはまる、というわけであろう。

じっさい、彼は処女作『意識に直接あたえられたものについての試論』(一八八九年)以来、科学上の成果の綿密な検討のうえに思索をいとなんできた。とはいえ、ベルクソンが依拠したのは、さきに検討した講演のなかで「いまだ数学的な形式をそなえておらず、またそうなる気配もない」と言われていた生物学であり<sup>10</sup>、あるいはまた、同様に数学的な形式をそなえそうもない心理学であって<sup>11</sup>、それゆえにこそ、数学と緊密に結びついたデカルト哲学とは相容れない議論を彼はしばしば展開するのであった<sup>12</sup>。しかしそれにもかかわらず、自らの思索がデカルトのその延長線上にたしかに位置づけられるものとベルクソンは考える。そのことはたとえば、フランス哲学会における討論の記録「心理—生理並行論と実証的形而上学」(一九〇一年)をみれば明らかである。

[ほ]ぼ一世紀も前に、我々は普遍数学の希望を断念しなければならなくなった。この断念そのものの上に諸々のあたらしい科学が構成されたが、これらの科学は数式に達しようとする底意ぬきに観察し、実験する。[...]したがって、かつてデカルトが提出したあれこれの回答の再検討を要求しても、デカルトの方法に不忠実であるとは私は思わない。私がこう言うのは、デカルト主義の哲学者にしても、自然界の諸現象のうちに数学的な機構にはうまく還元できない複雑な組織をすすんでみとめる[...]より柔軟な科学(une science plus souple)を目の当たりにすればそうした再検討を要求するであろうという、まさにそのような意味においてのことである(Mél. 474)。

一七世紀には天文学や力学、物理学といった数学へ還元可能な科学しか存在せず、だからこそデカルトは数学、およびこれら科学にもとづいて明晰判明の哲学をたちあげた。しかしその後、「生物学や心理学、社会学」(Mél. 488)など、かならずしも数式に固執しない「より柔軟な」科学が次々に確立された。なるほど、数学に範をもとめないがゆえに、新興の諸科学は確実性の点では狭

<sup>10</sup> 第三主著『創造的進化』(一九〇七年)は生物学上の知見に支えられている。

<sup>11</sup> 『意識に直接あたえられたものについての試論』は心理学上の知見をふまえて書かれている。

<sup>12</sup> たとえば、生理学上の知見にもとづき執筆された第二主著『物質と記憶』(一八九六年)は、心身問題をめぐってデカルト主義を明確に否定する内容を多分にふくんでいる。

義の自然科学に劣るものであろう<sup>13</sup>。ベルクソン自身が表現するところでは、「そのいずれもがそれ自身では真理を決定するのに十分でないが、それらを交差させることによって真理を決定することができる、そのような諸々の事実の線 (*lignes des faits*)」をたどることしかできないそれら諸科学は、「蓋然性の集積 (*accumulation de probabilités*)」によって獲得される」、言ってみればその程度の「科学的確実性」(*Mél.* 483)にしか達しえない。しかしそれでも、デカルトの時代には存在しなかったこれら「より柔軟な」科学に支えられつつ哲学的な思索をいとなむことは、そしてその結果、ときとして明晰判明なデカルト哲学と衝突しさえすることは、ベルクソンの考えではデカルト的な発想と相容れないどころか、むしろ正当にもデカルト主義的なのである。

ベルクソンはこのように、かならずしも数学には還元されえず、そのため確実性の点では狭義の自然科学に劣る、そうした新興の諸科学に依拠する自らの思索を、数学と一体化したデカルト哲学のいわば拡張されたバージョンとして位置づける。

### 三一二 蓋然性の集積としての哲学的思索

——「意識と生命」(一九一一年)——

上述のように、蓋然性の集積をつうじて一定の確実性に達する、そのように「より柔軟な」科学に依拠していとなまれる哲学的な思索は、それ自体もまた「直接的な確実性 (*une certitude immédiate*)」(*E.S.* 4 : 817)に到達することがないであろう。じっさいベルクソンは、一九一一年におこなわれた講演の記録「意識と生命<sup>14</sup>」のなかで、自身の提出するのが「より控えめな哲学」(*ibid.*)でしかないことを明言している<sup>15</sup>。

私が思うに、こういった大きな問題 [= 意識、生命、およびその両者の関

<sup>13</sup> この点については、パリのリセ、アンリ四世校でおこなわれた一八九三—四年度の「心理学講義」にみられる次の一節も参照されたい。「自然のうちに統一が存在するうえで […] いかなる結果もがその先行者によりまったく決定される、などということは必須でない。結果が先行者によってひかれた一定の限界をはみださないこと、そしてまた […] 予見が可能であること、これで必要かつ十分である。ただし、その予見は、低次の部類の現象や、存在のもっともひくい諸段階にかんしては確実であるが、よりたかい部類の事実についてはたんに蓋然的なものとなろう。 […] 諸現象の必然性と科学の確実性にも度合いがある。一つの科学があるのではなく、複数の科学があるのだ」(*C.* II 263-264)。

<sup>14</sup> この講演の記録は、一九一九年刊行の論集『精神のエネルギー』に収録された。

係という三重の問題]の解決をそこから数学的に演繹できる、そのような原理など存在しない。そして、物理学や化学においては起こりうるように、問題を解決へといたらしめる決定的な事実を私が手にしていないこともまたたしかである。ただ、様々な経験の領域のうちに諸々の異なった事実の集合を、すなわち、望ましい認識をあたえてくれるわけではないが、これを見いだすべき方向はそれぞれにさし示してくれる、そのような諸事実の集合を、私は見いだしていると思う。[...]ようするに、我々はすでにして一定数の事実の線(*lignes des faits*)を手にいれているのだ[。...]その各々は単独では、たんに蓋然的な結論へと我々をみちびくばかりであろう。だが、その全体が集中することによって、確実性への途上にあると感じられるような蓋然性の集積(*accumulation de probabilités*)を見せてくれるのではないだろうか(E.S. 4 : 817)。

数学には還元されえない「より柔軟な」科学に支えを得て哲学的な思索をいとなむとき、問題の解決を数学的に演繹することなど望むべくもないし、また、物理学や化学におけるように決定的な事実を一挙に見いだすこともないだろう。そのような思索にとって可能なのはただ、自らを下支えしてくれる「より柔軟な」諸科学が複数の「事実の線」をたどるとまさにおなじように、それら科学によってもたらされる知見を交差、集中させつつ蓋然性を集積し、そのことをつうじて「一つの限界へと向かうかのように決定的な確実性をめざす」(E.S. 4 : 817)ことだけである。ベルクソンはそのように言うのである。

#### 第四節 「より柔軟な」科学としての心霊研究？

—『道徳と宗教の二源泉』(一九三二年)—

以上にみたように、ベルクソン哲学とは自身の語るところによれば、デカルト主義の延長線上で、数学には還元されえず、したがって「事実の線」の交差によって蓋然性を集積することしかできない「より柔軟な」諸科学にもとづき、自らもまたこれら諸科学がさし示す「事実の線」の交差をつうじて蓋然性の集積をはかる、そのような思索のいとなみに他ならない<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> ただし、ベルクソンの考えるところでは、哲学的な思索が曲がりなりにも確実性に達しようとしたら、それはこのような「より控えめな哲学」のみにゆるされることである。

<sup>16</sup> ただし、ベルクソンがこのような「事実の線」の交差について、とくにそれを自らの方法論として語るようになるのは、一九一〇年代以降のことである。このことは、生命進

さきに検討した講演「[生者の幻]と[心霊研究]」のなかでの発言がたんなる社交辞令にとどまるものでないとするれば、心霊研究にたいするベルクソンの関心もまた、じつはこうした問題意識に裏うちされていたのではないだろうか。すなわち、自然現象をあつかいながらも狭義の自然科学の方法をとることがなく、インタビュー、記録と伝聞の収集、比較検討、およびアンケート調査といった代替的な方法にうったえざるをえない心霊研究とはベルクソンにとって、あらたな「事実の線」を提供してくれるもっともあたらしい「より柔軟な」科学だったのでないか。

そのように考えたとき、四冊の主著をつうじて唯一、『道徳と宗教の二源泉』（一九三二年）においてみとめられる心霊研究への言及はきわめて示唆的である。

第三主著『創造的進化』（一九〇七年）で提出した「エラン・ヴィタル」の学説に、あるいはこれへと達するうえで導きの糸となった「生物学上の知見」に、「神秘家の経験」というあらたな「事実の線」（D.S. 262-264 : 1185-1186）を交差させることにより、この最後の主著にとっての最大の懸案である「神の本性」（D.S. 267 : 1189）の問題に見とおしをあたえたあと、ベルクソンは「おなじ方法」をこんどは「彼岸（l'au-delà）の問題」（D.S. 279 : 1198）にも適用し、「すでにこの世において、魂の活動のかなりの部分が身体からは独立しているという事実」を明るみにした第二主著『物質と記憶』の成果と「神秘家の直観」とを交差させつつ、「死後の生（survie）」について「確実性へと変化しうる蓋然性」（D.S. 279 : 1200）に達しえたことを確認する。

注目すべきは、この死後の生という問題について、またべつの個所でベルクソンが次のように述べていることである。

だが、心霊科学（la science psychique）が確実なものとして提出している成果のうちの一部をしか考慮しないとしても、それが探求の途についたばかりである未知ナル大地の広大さをうかがい知るには十分である。この未知の世界からかすかな光が我々のもとにとどき、それが肉眼でも見えたとしよう。このとき、眼で見え、手で触れられるものしか存在しないとけっきよくのところは一般に考え習わしてきた人類に、いかほどの変化が生じる

---

化の原動力の解明をめざす第三主著『創造的進化』と、神の本性をさぐる第四主著『道徳と宗教の二源泉』（一九三二年）とのあいだの方法論上の変化、もしくは断絶の可能性を示唆するものでもあるが、この点について考察することは本稿の目的をこえる。

ことだろう！そのようにして我々にもたらされる知見は、おそらくは魂の低次の部分にのみ、最低の度合いの靈性にのみ、かかわるものでしかないだろう。とはいえ、大部分の人が抱いているように見えながら、たいていは言葉のうえだけの抽象的で効力のないものにとどまる彼岸への信仰(unc croyance à l'au-delà)を生きた実効性のある現実へと変えるうえで、それ以上のもものは必要ないであろう(D.S. 337-338: 1244-1245)。

ベルクソンはここで、「心靈科学」という用語を用いつつ、その知見がもたらすであろう効用を論じている。それが彼岸について教えてくれるのは、なるほど魂の低次の部分もしくは最低の度合いの靈性にかんする事柄にすぎないかもしれない。だが、曲がりなりにも未知ナル大地から現に光をとどけてくれる「心靈科学」は、かならずや死後の生を確信させることになるはずだ。ベルクソンはそう言うのである。

ここで言われている効用は、諸科学の動向に学びつつ蓋然性の集積をはかろうとする哲学者ベルクソン自身についても、おそらくはあてはまるものであったろう。これよりさかのぼること二一年前におこなわれた<sup>17</sup>、最前にも検討した講演「意識と生命」においてベルクソンは、処女作から『創造的進化』までの自らの所見をふりかえりつつ、しかしながら現有の「事実の線」をもってしては、死後の生という問題にかんして「蓋然性の領域」にすら身を置くことはできず、依然として「可能的なものの領域」(E.S. 27: 835-836)にとどまらざるをえないことにふれていた<sup>18</sup>。一九一一年の時点では蓋然性をしかるべく集積でき

<sup>17</sup> ただし、以下で言及する箇所それ自体は、論集『思想と動くもの』(一九三四年)への収録にさいして加筆されたものである。したがって、当該箇所は厳密に言えば、一九一一年の時点における自身の思索の進捗状況をベルクソンがのちのち反省した文章として受けとるべきである。

<sup>18</sup> 以下に当該箇所を引用する。「さて、いましがた追ってきたばかりの事実の線をはなれて以前の線へもどるならば、すなわち、人間の心的活動は脳にかかわる活動にとどまるものではないこと、脳は運動習慣を蓄積するが記憶は蓄積しないこと、思考のその他の諸機能は記憶の場合よりもいっそう脳から独立していること、したがって人格の保存や、あるいはその強化までもが身体の崩壊後にも可能であり、また蓋然的ですらあること、これらの点に鑑みるならば、次のような推測が成りたしはしないだろうか。この世で出会う物質のただなかを通過するうちに意識は鋼に焼き入れをしたようになり、より強度の生を生きるべくいっそう効果的な活動の準備をしているのではないだろうか。この生を、私はやはり闘いの生として、発明の要求として、創造的進化として思いえがく[。…]これが仮説に過ぎないことは私もみとめる。我々はさきほどまでは蓋然的なものの領域にいたが、ここではたんに可能的なものの領域にいる。いまは我々の無知を告白しよう、ただし、その無知を決定的なものと考えてあきらめてはならない。意識を有した存在者たちのための彼岸が存するとすれば、これを探求する手段が見あたらないうけはないだろう」(E.S. 27: 835-836)。

なかったこの問題に見とおしをあてるうえで、「神秘家の直観」とならんで心霊研究は、たとえ魂の低次の部分もしくは最低の度合いの霊性にかかわる「事実の線」をしかそれが提供してくれないとしても、一定の寄与をなしたのに相違ない<sup>19</sup>。だとすれば、ベルクソンが心霊研究協会の会長を務めたのが講演「意識と生命」の二年後にあたる一九一三年であったことも、たんなるエピソードとしてすますことはできない事実だと言わねばなるまい。

## 結語

以上、心霊研究にたいするベルクソンの「熱烈な好奇心」がいかなる要因によって動機づけられていたのかを考察した。その結果、「より柔軟な」諸科学に依拠しつつ「事実の線」の交差をつうじて蓋然性の集積をはかる、そのような哲学上の方法論をかかげるベルクソンが、すくなくとも一定の時期以降には死後の生という問題をめぐって、心霊研究をそうした「より柔軟な科学」の一つとして位置づけていたという仮説が、それこそ蓋然性を集積するごとくに、テキスト上の直接的ないし間接的な関連をたどることにより導かれた。

心霊研究の動向までも熱心に見守る、あるいは見守ることにならざるをえない、というのはかなり個性的な哲学的思索の進めかたではあろうが、とりわけ科学に寄りそう思索というものを考えるとき、ベルクソンの方法論は多分に示唆的な要素をふくむものではないだろうか。

---

<sup>19</sup> 個別的、特殊な局面でベルクソンが心霊研究からどのような「事実の線」を受けとり、かつまたそれをもとに具体的にいかなる思索をつむいだのかについては、残念ながら著作その他の資料等からこれをうかがい知ることができない。ただ、その点にかんする類推にさいして比較項とすべき事例であれば、テキストにそくして指摘することができる。ベルクソンは『物質と記憶』において、我々の知覚と記憶が権利上は空間的、時間的に無制限であること、しかしながら、「生の必要」のためにそれらが事実上は一定の制約を受けること、それゆえ、生の機構の不調時にそれらが通常の制約から離れうることを主張するのであるが、当の『物質と記憶』、および「[生者の幻]と[心霊研究]」や『道徳と宗教の二源泉』のなかで彼はこの主張を、死に瀕した者が体験するとされる走馬灯的ヴィジョンやテレパシー等の知覚上ならびに記憶上の異常と関連づけ、またときにはそれらによって自らの主張を証拠だてようとさえしている。Cf. M.M. 172 : 295, E.S. 77 : 873, 79 : 874, D.S. 336 : 1243.そして、とくに最後にあげた『道徳と宗教の二源泉』の該当箇所においては、生の機構の不調時に「開いた」「門」から入ってくる「外なるもの」が「彼岸」より飛来したものであり、そのかぎりにおいて当該の「異常知覚」は「心霊科学」のとり組むべき「それであることもありうる旨が述べられている。したがって、ベルクソン自身が心霊現象と心霊研究上の知見とを、こうした知覚上ならびに記憶上の異常とそれをめぐる研究とに類比されるべきものとして位置づけていたことは間違いない。